

特 11
624

演劇 金澤龍玉著作
脚本 增補月桂川
全

088631-000-2

特11-624

增補月桂川

金沢 龍玉/著

M27

DBJ-0290



持 11
624

演本劇增補月桂川

場割及役名

上の巻

石部宿棹鼻の場
同油屋敷の場
同奥座敷の場

信濃屋根

半 一おじやれお萬

一帯屋長右衛門

村役人孫兵衛

一 同 お 勘

一雲助大勢

宿引長

一 馬 士 仁 三

一旅人仕出し

娘 お

一 雲 助 又 六

一坂参り一人

娘 お

一 家 主 六 兵 衛

一両掛持二人

娘 お

一 丁 雅 長 吉

油屋作兵衛

一 片 岡 幸 左 衛 門

中の巻

六 圓 一 軒 茶 屋 の 場
四 條 河 原 惣 嫁 小 家 の 場
同 幸 左 衛 門 殺 し の 場

一橋下の巻

六 一 惣 嫁 お 怪

一 片 岡 幸 左 衛 門



一 仲居	お竹	一同	お篋	一 女房	お絹
一同	お梅	一 帶屋	義兵衛	一 帶屋	長右衛門
一同	お京	一 丁	雅長吉	一 仕出し	大勢
一 下女	お松	一 佛檀屋	才次郎	一 坊主	一人
一家	來可助	一 藝子	雪野	一 惣嫁	どめき大勢
一 國侍	鐵右衛門	一 針	の宗兵衛		
下	の巻	川屋	道内の場		
一 信濃屋	娘お半	一 婆	々お熊	一 帶屋	長右衛門
一 橋下	のお六	一 針	の宗兵衛	一 男衆	大勢
一 甥	の義兵衛	一 信濃屋	後家お石	一 捕巻	大勢
一 丁	雅長吉	一 三筋	のお糸	竹本	連中
		一 四ツ	井竹八		

演劇 増補 月桂川

上の巻 (石部宿 棒鼻の場) 同 油屋敷の場

造物一面の淺黄幕所々に並松石部と印せし傍示杭建有り合方にて幕明く「ト向ふより伊勢參宮の仕し大勢出て來り」△「時にまた日暮に間が有れと石部泊りと仕ようかの」□「夫が宜うムる是々兄此石部の旅籠屋は何處が奇麗だの被參り」左様でムり升讀岐屋か油屋が宜うムり升×「何でも宜ひ難の有る内にせうぞや△「又そんな事いふわいの」皆々、行升うく」ト皆々這入る向ふより六兵衛更たる拵へにて杖を突跡よりお半娘の拵へお徳お吉お兼同じ拵へ丁雅長吉等を囓り男一人兩拵をかつぎ出て來り花道にて お徳お半さん草臥たでムんせうなア お半「何の私しや歩行のが氣が曠てよかつたわいなア お兼「私しも面白ひ事では有わいなア」お吉「お前方は面白ひか知らぬが私しや足が痛うてならなんだわいなア」六兵衛「イヤキキ」お徳「お半さん今日翌の事翌の晩は内で寛々お唄々様の乳が呑るぞや」ト本舞臺へ來る長藏宿引の形りにて出て來り」長藏「あなた方お泊りでムり升うな」六「イヤわしは定宿の油屋へ行ねば成らぬ」長「夫は丁度宜しうムり升る私は其油屋の者でムり升る」ト六兵衛耳の聞へぬこなしにて「六」ハテ定宿が有といふに 吉「おちさん此人は油屋の人じやといな

ア「早う言う言へばよいに」長「サアお出被成升せ」ト皆々上手へ這入る橋掛りより片岡幸左衛門蒲團を着て細の帯を、雲助の拵へ跡より馬士「三雲助又六外に雲助大勢附添出て来り」皆々「サア金はどうするのじや」幸左衛門「何も其様に言す共い、じやねへる」仁三「我れはよう此宿へのめく来たなア」又六「此宿に居た時立場の錢と問屋行の荷物を盗んで仲間の方に難義を掛て夫でうぬ濟と思うか」幸「成程手前達にろういわれて見ればギウの音も出ねへが今日油屋へ持込の三度荷其渡り引さへ濟ばわいらの借位ひは濟す程にマア爰を放してくれ」仁「我れがろういふならぶち叩きするにも及ばず」又「ろんなら油屋迄」皆々「サア一所に行け」ト皆々這入る淺黄幕切て落す

造物二重上手筆太に油屋と書し白壁下手株木門例の所門口伊勢月參杯の講札掛け都て油屋の体二重上手に六兵衛旅日記を記し居るお半お吉お徳長吉紙燃として居る馬士頃にて道具納る「サア」お徳さん出来升た「本に千草結びといへば出雲の國とやらでする事じやないかいさア」兼「夫は十月に成ると神様が寄らしやんして縁を結ぶろうでムんぞ」半「連も神様が結びしやんすなら人柄の能ひ堅い殿御と結んで下さんすりやよい」長「そんなら此長吉の心と能う似て居り升茶漬が嫌いで堅が好き堅い女房持が樂みじやわいさア」言「サア」始めよう」半「私が隣りの長右衛門さんも書てムんせうなア」兼「一番に書て有わい

なア」長「此長吉も入れてムんせうな」言「サア取り分けて開らいて見なさんせ」皆々「お兼さんじやわいなア」長「六兵衛さんとお兼さんじや」六「何じやおれが耳が遠いと思うて馬鹿に仕おるな」言「伯父さんは千草結びじやわいなア」兼「今度はお半さんじや相手は誰でムんす」兼「長の字じやわいなア」言「お待」長右衛門さんはこちらでムんす」兼「本にこちらは長吉じやわいなア」長「しめた」言「長右衛門さんと私したよ」半「イェ」こりや間違うたのじやお吉さんの結びやうが悪ひに依てじやわいなア」言「お半さん無理ばつかり私しがしたのじや有まいし」兼「何でも長吉のわざじやわいなア」長「又人のわざにするのかいなア」兼「是からむくろじ取をせうではムんせぬか」半「私しやうんな事嫌いでムんす」六「何じや又お半坊がすねたのが長吉我が女の中へ這入っているゆへじや世話のやけた者じや」ト向ふより長右衛門旅形り一本差跡より男両掛を擔ぎ出て来り「長右衛門御亭主今戻り升た」ト奥より亭主作兵衛出て来り「作兵衛、是は」お早ひお下りでムり升たサアお這入り被成升せ」長右「ヤレ」草臥た」長「ヤア長右衛門さんがムつた」半「本に長右衛門さんじや」長右「ナ、長吉お半坊友達の衆も一所にこりやお蔭參りじやさア」長「モシ六兵衛さん長右衛門さんがムつたわいの六」ナ、是は長右衛門さん扱は伊勢參宮被成のが長「イヤ私しはチト商賣用で名古屋の東海道へ廻り升たがお前さんの子供を連れてよう參宮被成升たな」六「イ

ヤモウ世話斗りやけて成り升ぬ 長「お半坊無草臥たで有うのう翌は一所に連立て歸り升せう 皆々「そんなら翌は長右衛門さんと一所でムんすかいなア 半「早う夜が明ければよいになア 長「夫ではこつちの勝手がイヤ勝手といへばモウ飯を喰せそうなものじやが「ト下女お勘出來り」勘「ハイあなたお風呂が宜しうムり升る 長「先客の衆は能うムるか 勘「あなた方はモウ濟升てムり升る 長「そんならドレ草臥を揉でこうか「ト長右衛門先に供の男附添お勘案内して奥へ這入る」作「ハイあなたも御膳を上げ升せうあちらへお出被成升せ 長「六兵衛さん飯じや〜」六「何じや飯じや」作「わしらの座敷はここでムる 作「お二階へお出被成て被下升せ 徳兼「ろして長右衛門さんも二階でムんす 作「長右衛門さんは奥の見通しでムり升 半「やつぱり二階に仕なさんすといふ事を 長「お半さんろんな事いわずと早うお出被成升せ 作「サア御案内致し升せう「ト皆々奥へ這入る株木門の内より幸左衛門逸て出る跡より以前の雲助追駈出て内へ這入り」皆々「うぬ逃すな〜」又「此油屋へ持込の錢を取どぬかして逃やアがるな 仁「錢が無けりやア叩き殺せ〜」ト奥より作兵衛出て」作「是々お客が有よ靜にさんせ 皆々「イヤ構わんすな〜」作「マア待んせいの「ト挨拶する」幸「こつちに誤りが有ばころ先つさから黙つていりやア打殺しても大事ないとぬかしたなサア殺せ〜」と言つちやア物に角が立コソ手前達に損は掛けぬマアちつと待て呉れ〜」トイヤ

ヤ成らぬ〜」又「むだ口聞すと問屋場へ引張て行け 皆々「サアうせい〜」ト引立に掛る作兵衛留る此以前奥より長右衛門窺ひ居て此時前へ出て皆々を止め」長「是待つしやれ一体どうした譯じや 又「此野郎は元わしらの仲間で此宿に居る内立場割の錢と問屋行の荷を盗み其儘何所へやらうせさらした故 仁「其尻拭ひを仲間から償うて置た所又のめ〜」此宿へ來さらした故其勘定を取と言ふのが元の起り 長「シテ其高と何程じや 又「木綿荷の償代が十五貫 仁「立場割の錢が四貫五百合して十九貫五百 長「私しも爰へ泊り合したか他生の縁ちつと志しの事も有り其錢私しが償うて遣り升う 皆々「エ、「ト幸左衛門是を聞長右衛門を見て恟りして」幸「ヤこなたは「ト逃げようとするを皆々捕らへて」皆々「逃やアがるな〜」長「ア、是何にも言はず言わば身の耻借つたが不肖十九貫五百と有れば金に直せば三兩是を持て行つしやれ「ト小判三兩を出して渡す」仁「是皆よ打ても叩いても出ぬ所を小判で三兩 又「能い旦那がムつた故こつちも仕合せ 仁「エテこんな跡はひどい目に合う物じや足元の明ひ内行うか 又「夫が宜かろう旦那大きに 皆々「有難うムり升「ト皆々向ふへ這入る」作「イヤモウ旦那がムつた故仕合せな男じや 長「翌は何れ人足を雇わねばならぬが是を縁に此男を頼み升せう 作「夫は丁度能い都合イヤ今のどさくさで奥のお客を捨て置た旦那お早うお休み被成升せ「ト作兵衛奥へ這入る 長「幸左衛門様マア下にムらつしやり升せね

前様はなア〜此形りは何でムリ升る誰れ有う今出川の御家中片岡幸之進様の御子息が此街道の宿場人足どりあんまりの零落よう此長右衛門は代々の御出入殊に御恩の有る幸之進様追々寄るお年若もの事の有た時には片岡のお家は誰が立て升る向後心を入れ替て元の侍に成るね心ならお供致て歸り升此形りを親御様が御覽じたらどの様に思し召升思へば〜見下げ果たお心じやなア 幸「イヤモ段々の其詞不孝の罰で此したら心は遠うに改て居れど何を言ふにも今の身の上親人へ取成し仕て被下なら急度心を入替升長右衛門殿是じや〜」
 「ト拜む」長「お前がそふ言ふお心さら此形りでも置れ升せぬ〇」
 「ト懐より金を出し」
 「是でお前の身の廻り髪月代も仕てムリ升せ翌は一所にお供致し升せう 幸「何から何迄忝ひ元の侍迄は行くまいがせめて雲助の足を洗うて 長「翌は早々お供して古卿へ歸る錦の曠着 幸「洗濯給など請け升せせう」
 「ト幸左衛門思入有て向うへ這入る」長「ヤレ〜日頃尋る幸左衛門様お供して歸れば親御様にも賑お悦び夫こそうと清洲のね館から研に來たアノ刀両掛の中へ入れて置たれば氣遣ひは有まいドリヤ早う寐ようか」
 「ト奥へ這入る向うより以前の長藏先に旅人の仕出し三人附て出て來り」長藏「何れ御相談致し升マア〜」
 「お出被成升せ」
 「永ひ旅を抱へているもの故 幸「辨當くるめ百三十文でなければ 〇」
 「泊る事ならぬて 長藏」
 「左様ならぬ泊め申升せうお這入り被成升せ」
 「ト内へ這入り」
 「〇」
 「時に風呂とさうじやな 長藏

「直にお入り被成升せ 幸「ろんなら足を洗ふにも及ぶまい 長藏」
 「サアムリ升せ」
 「ト奥へ這入る是にて返し

造物二重上手廊下附の障子家体向ふ唐紙襖其次茶壁床の間下手板塀の前柴垣都て油屋座敷の体二重にお蔦二枚折を建寐床を敷て居るお勤行燈の傍に鏡臺を置化粧仕て居る時の鐘にて道具納る 勤「其床を敷つとそちらへお敷此座敷は京のお客様一人の筈でムんしたに 勤「イヤ〜今夜は込合うに因てアノ女連の鎌のお客を寢させ升と旦那様の言附でムんすわいなア 勤「鎌から鼻息も聞へまいわいなア 勤「お前をこを早う仕舞被成 勤「ハテ意地の悪ひマアお待といふに」
 「ト奥より作兵衛出て」 作「是々床を敷たらあちらのお客へお茶を上げよ 勤「ハイ〜」
 「トお蔦鏡臺を持お勤附て這入る奥より長右衛門出て」長右「御亭主寐床と何所でムるな 作「ハイ是へた出被下升せ」
 「ト上手障子家体へ連行」長「毎度お世話に成り升るあちらに置た両掛を持て來て被下 作「ハイ〜」
 「長り升た」
 「ト奥へ這る長右衛門着物脱夜着を着るお勤両掛を持出て 勤「ハイお荷物を爰に置升る〇」
 「ト又盆に茶を乗せ片手に枕一ツ持出て」
 「ハイお茶上り升せ 長「アイ〜」
 「勤「あなたお草臥でムんせうかみ足でもお擦り申升せうか 長「イヤ〜」
 「おれは按摩は嫌ひじや 勤「ろんなら何所ぞ外の所を 長「ヤレ情けないそのちへ行んのいなア 勤「本に情け知らず後に夜這ひに來てこまそうエ、好んお方か

十
ア「ト奥へ這入る長右衛門は寐る奥よりお蔭案内して六兵衛出て来り」六「何所へ寐るのじや」
「ハイ爰でムリ升る左様なら御緩りとお休み被成升せ」トお蔭這入る」六「是々姉上最
ろつと能い蒲團貸ぬかい枕でも取替てくれエ、今夜一晩じや辛抱せい」ト奥より孫兵衛弓
張提灯を持宿帳と矢立を持出て」孫兵衛「ヘイお宿帳を付けに上り升た」六「何を賣らつしや
るか」孫「お宿帳でムリ升る」ト六兵衛提灯を見て」六「ハア宿帳かわしは今二階座敷で附け
て貰うてお前二文宛取たじやないか」孫「左様なら京の女連のお方でムリ升か大きに不調法
申升た」六「ハイ年寄れば獨り寐るが宜くムる」孫「是はお蛙子と來ているぬへ」六「左様じや
モウ四ツでもムリ升せう」孫「蟬の閉抜けめが」ト辞義して奥へ這入る」六「宿内の衆は叮嚀
な者じやドレ寐ようか」ト時の鐘六兵衛は寐る奥よりお半逃て出る跡より長吉緋袴一枚に
てソイヤ々と言乍ら出て追廻す内行燈を倒し暗闇に成りお半は上手長右衛門の傍へ逃て來
て」半「伯父さん長吉が悪ひ事をする河つて下さんせいなア」ト長右衛門を揺起す長右衛
門は現の思入にて」長右「是はしたりお絹草臥たわいおア」半「アレおばさんじやと思てじや
ろうな」ト障子をべる奥より長吉行燈を提げ出て」長吉「お半さん何所に隠れていやん早
う戻つて寐やんせ」ト上手の方へ行」トハテ合点の行ぬ」ト障子の内を覗き」「サア」
存外の事を拵へ居つたエ、腹が立く何れ角も立わい」ト八郎兵衛の唄に成り」ト今

隣の宿でおじやれが諷うの古手屋八郎兵衛惚たお妻を彌兵衛に寐取られた腹立丁度今おれ
が身の上」ト床の間に有脇差を取て禪へ差手拭にて頬冠して花道へ行き」ト千人萬人の
男の中に誠を立るは此長吉お半此世で面らは見ぬぞやいつそ踏込二人り共イヤ」向ふを
切ればこつちも命が戀の意趣を晴す近道ハテなア」ト、最前聞た屋敷から京で研せと長右
衛門が預つて來た大事の棒鞘摺り替るには幸ひの隣りの騒ぎ」ト廊下より障子をそつと明
け刀の箱を持來り自分の差て居る脇差と身を摺替元の如くする此内六兵衛は寐言を言ふ長
吉恟り震う奥よりお勘手燭を持紙を嚙へ出る長吉驚て下手柴垣の前へ屈じお勘は見て」勘
「そこに居るのは誰じやナ、お前は女中連の丁雅さん今頃そこに何してじや」長「エ、おれ
はアノ今爰へ小便仕に來たのじやがお前又今頃爰へ何しに來たのじや」勘「わしかへわしは
アノ長右衛門さんに用が有て」長「コレ長右衛門わの」ト叫み見度ば爰に」ト障子を明て
手燭を差出す長右衛門は超上つて手燭を叩き落すお勘恟りするお半は長右衛門に取付が木
の頭長吉はお勘を引轉す六兵衛は起上る此模様宜敷拍子幕

中の巻

六 角 堂 の 場
祇園 二軒 茶屋 の 場
四條河原 惣縁 小家 の 場
同 幸 左衛門 殺し の 場

造り物平舞臺上の方門の出しかけ真中に床机置都て六角の模様すが、きにて慕明く「ト床机に仕出し大勢坊主一人交り腰を掛け居て」○「何といつでも賑わしい事ではござんせぬか□「遣わ花の都では有わいの。△「夫々枯たる木にも花咲といふ大悲の誓ひじやて 坊主「何ばう大悲の誓ひでも只頼んでは利升せぬお百度も錢ざしでせうより錢で一文宛敷取するがよいて。○「夫ではこなた衆の勝手は能からうがこつちはやつぱり只で拜むがよいて 坊「ハハ阿彌陀も錢の光りと言へば兎角當世は錢づく錢と女を否がる者はあいてハ、□「こなた出家の身で女を好きかな 坊「ハハ佛も元は凡夫じやもの。○「らんからこちも早ういんで囃の件など拜うかい 皆「サアムれ〜」ト皆々門の内と橋掛りへ別れ這入る門の内よりお絹着流し抱へ帶跡より下女お松扇紗包を持附添出て」○「絹「マア〜」お百度も仕舞たれば愛で一服仕升せう我身も草臥たて有う。お松「私は何共ムり升せぬがお家様は無お辛倒ムり升せう是にお休みの間にお土産買て參じ升せう。絹「本に頼と忘れて居たらんなら太義乍ら買て來てたも 松「畏り升た」トお松門の内へ這入る向ふより義兵衛着附羽織にて出て來り」義兵衛「サ、お絹様御參詣被成升たか 絹「お前様も御參詣の又芝居見物でムり升かへ 義「何の芝居所か観音様より有難いお前の跡と慕うて來升たが毎日々々よふお百度被成升るなア一体何の願でムり升るぞい 絹「さいなア兎角女の願と言ふは夫婦中ようふ舅御様のお氣に違わぬよふにと観音様へ御苦勞掛け升わいなア 義「ア、貞女々々そういふ心の美しい其顔とに首丈けの我ら明暮口説ても聞入の無い胴欲さ又夫婦中能うと祈らしやる兄貴は川東へ這入り込みまた其上隣りのお半に迄響を入れたを知らずかいなア 絹「義兵衛様そりや折節の東通ひは男の有り内なれ共隣りと内との間柄ある年端も行ぬお半様の事ろんを事が有て能い物か 義「お半と譯の有る証據は此狀じや長様參る半より○「ト狀を出して見せ」とつこい夫から御覽じ是はちつと此方に入用の大事の狀成れ共わしが言ふ事ウンと言ふ氣なら又遣るまい物でもない 絹「其様に言て下さんす事ハテモウ誠の心なら折を見合せどうなとするわいなア 義「エ、忝ひお前さへ其心なら内て何ばも能い首尾はわる手附に一寸 絹「ア、是門中で内へいんだらどうなと成わいなア 義「サット是之近年の不調法そんなら内で待て居るぞへ 絹「ちやつといなんせいなア 義「とは言へ一寸 絹「エ、ひつこい 義「悴めじやあア「ト向ふへ這入る」 絹「現在の兄嫁に徒ら事を言掛る道知らず何よりは今の狀アノ人に持して置ては主しの言抜けも何とやら穢らしい事ながら當座遁れと間に合詞もどうぞアノ狀が○「ハハ何と仕たら能らふナア」ト思案のこなし橋掛より長吉肴籠を持出て來り」長吉「サ、隣りのお家様じやムり升せぬか 絹「サ、長吉何所へ行のんした 長「ヘイ四條の室町迄參じ升た 絹「サ、左様ウチトこあさんに頼たい事が有るがちよつと愛へ掛けて下さんせ 絹

ぬよふにと観音様へ御苦勞掛け升わいなア 義「ア、貞女々々そういふ心の美しい其顔とに首丈けの我ら明暮口説ても聞入の無い胴欲さ又夫婦中能うと祈らしやる兄貴は川東へ這入り込みまた其上隣りのお半に迄響を入れたを知らずかいなア 絹「義兵衛様そりや折節の東通ひは男の有り内なれ共隣りと内との間柄ある年端も行ぬお半様の事ろんを事が有て能い物か 義「お半と譯の有る証據は此狀じや長様參る半より○「ト狀を出して見せ」とつこい夫から御覽じ是はちつと此方に入用の大事の狀成れ共わしが言ふ事ウンと言ふ氣なら又遣るまい物でもない 絹「其様に言て下さんす事ハテモウ誠の心なら折を見合せどうなとするわいなア 義「エ、忝ひお前さへ其心なら内て何ばも能い首尾はわる手附に一寸 絹「ア、是門中で内へいんだらどうなと成わいなア 義「サット是之近年の不調法そんなら内で待て居るぞへ 絹「ちやつといなんせいなア 義「とは言へ一寸 絹「エ、ひつこい 義「悴めじやあア「ト向ふへ這入る」 絹「現在の兄嫁に徒ら事を言掛る道知らず何よりは今の狀アノ人に持して置ては主しの言抜けも何とやら穢らしい事ながら當座遁れと間に合詞もどうぞアノ狀が○「ハハ何と仕たら能らふナア」ト思案のこなし橋掛より長吉肴籠を持出て來り」長吉「サ、隣りのお家様じやムり升せぬか 絹「サ、長吉何所へ行のんした 長「ヘイ四條の室町迄參じ升た 絹「サ、左様ウチトこあさんに頼たい事が有るがちよつと愛へ掛けて下さんせ 絹

左様なら御免被成升せ 頼「こなさんモウ元服で有うか」長「へい此暮には元服さすとかつしやつていふり升る 頼「こなさん元服さんしたら能ひ男振りで有うぞいのう」長「お家さんおだて、ね呉被成升るなシテ頼みたいとかつしやつたは何でふり升る 頼「サア頼みたいと言ふの、アノこなさん所のお半様とこちらの長右衛門殿と譯知つていやんすか」長「へい其事でふり升るか」○イ、エ存じ升せぬ 頼「こなさんとした事が私しに隠す事が有るぞいの外の者と違ふ誰にも咄す事ではない程に氣遣ひせすと言うたがよい」長「其様にかつしやる事なら申升るが此春伊勢参りの時戻り道で石部の宿でイヤモウ大体やけたいな事じやふり升せなんだ腹が立やら其下も立やう其事を思ひ出すと涙がこぼれ身節が碎るようぞ口惜うふり升る 頼「そりや道理じや思て居るお半様を寐取られた事じや物腹が立いで何とせうぞいの」長「おんの私しがお半様お思て居り升るのかいな」 頼「是はしたり隠さんすないのうお半さんどこなさんとは似合相應な能い女夫じやコレ其仕返しにはこなさんの戀は私しが世話してやるが夫でもお半さんに惚れて居やんせぬか」長「左様からお前様のお世話でお半様と女夫に被成て被下升せ其代りにお前様のかつしやる事はどんな事でも聞升るぞうぞ女夫の事を 頼「ろういわんすと咄しよ成るといふもの何で有うと此中にこちらの内でお半様と長右衛門殿の事を打割て仕舞うは其時こなさんを呼にやるに依てこなさんの言ふにはイヤお半様

は私しが女房外に念頃男の誰も無い伊勢参りの折りから念頃しているは此長吉じやと替へどの様な證據物が出様其何處迄も言ひ突張て居やんすとお半様はこなさんの女房よし又主人で有うが家來で有うが一度一處に寐たら女房にするが世間のお定りなんと此思案はぞうで有うぞいのう 長「成程コリヤ氣の附所お半様と私しと念頃して居ると何所迄も言ひ張る事は合点でふり升るが夫ではこちらのお家様が私しを追ひ出すでふり升ふ 頼「ろんな事案事て居て色事が成物かモシモろう成た時はお半様連れ出しやんせいのう 長「ろうした所がお耻しい肝心の物が 頼「ろりや私が吞込んで二人一所に暮らされる様も仕てやる程に案じる事はないわいの 長「ろんなら内を追ひ出されてもお半様と一所に世帯持して下さり升るか 頼「チイのうこりや當分の小遣に遣り升せう」ト壹歩を五ッ出して紙に包みやる」長「ヤコリヤ一步を澤山に一步二歩三歩四歩五歩ふり升ろんなら是を私しにお呉れ被成升るかお忝けのうふり升る其代りお前様のかつしやる事は何でも背きは致ま升せぬぞうぞ宿這入りの事を○「トこなし有て」モウ世帯持氣に成てけつかるハ、ハ、ハ、ハ、ト門の内よりお松出て」長「お家様只今戻り升た 頼「チ、太義で有た長「お松さんお家様のお供して參んしたか 頼「時に大分遅う成り升た長吉さんモウいに升せうか 長「お供致し升せう 松「サアお出被成升せ」トお絹先きにお松附添跡より長吉肴籠片手よ金を弄し乍ら向ふへ這入る是にて返

造り物奥深に石の鳥居上下藤屋中村屋の心にて軒に紅摺提灯横手に暖簾を掛け床机二脚並べ都て祇園二軒茶屋の体願唄にて道具納る「ト向ふより片岡幸左衛門着流し大小可助仲間にて付添出て」幸左「日和が能いと賑やかな事だ」ト本舞臺へ来る橋掛りより長右衛門着附羽織風片敷包の棒鞘を腰にさし出て「長右衛門」是は片岡幸左衛門様ではムリ升せぬか 幸「ナ、長右衛門殿此程は御意得申さぬ 長、あなた様にも御機嫌能体珍重に存じ升る扱御貴殿様に折入てお尋ね申たい義がムリ升る 幸、何身共にろりや何事でムるな 長、イヤ外の義でもムリ升せぬ」ト可助を見て「何御家來御苦勞乍ら奥へムつて追附旦那を御同道申から座敷を明て置て呉と言付て被下 可助「畏り升た」ト可助上手暖簾口へ這入る 長「他聞を憚る大切な事幸左衛門様お腹はお立被下升なお尋ね申たいと申義は此刀の事」ト棒鞘を出す「幸、其刀が如何致した 長、去れば此刀當春貴殿にお目よ掛つて御同道の折お屋敷にて研に掛けよとお預り申て持歸り早速研に遣し漸々今日お屋敷へ持參致た所似ても似付ぬなまぐら物 幸、是がなまぐらに成たら如何した 長、近頃慮忽ち事ながらあまたのお差料と替り升たと言ふ様な事はムリ升まいかと存じ升て 幸、是サ々々長右衛門何を申仮染成らぬ大切の義此幸左衛門を盗人に致すか馬鹿くしい 長、左様にお腹をお立被下升ては返

つてお氣の毒に存じ升る」トこなし橋掛りより才次郎着附羽織にて出て 才次郎「是は長右衛門様幸左衛門様ではムリ升せぬか 幸、おまじは是成る長右衛門が親類 長、佛檀屋才次郎何れへ行きやつた オ、ハイチト用事がムリ升て此邊迄イヤ早速乍ら長右衛門様チト急に金子入用がムリ升て宿先へ歸り升たら早速お返し申升程にお手元にお持合せがムリ升ならどうぞ三十両お貸被成て被下まいか 長、ついで無いお申しが無心幸ひお屋敷の爲替の金請取て來た内三十両用立升せう」ト小判三十両出して渡す オ、是は有難う存じ升る明日は早速持參致し升る 長、時に幸左衛門様藤屋の座敷で一ツ參り升せうか 幸、屋敷に用事もあり是にてお別れ申 長、まア左様おつしやらすとお越し被成ませ才次郎靜に仕やれ」ト幸左衛門先に長右衛門上手暖簾口へ這入る オ、能ひ所で長右衛門様にお目に掛り三十両借請たれば是で雪野の身の上も片付といふもの」ト下手の暖簾口より雪野出て 雪野「ナ、才次郎様お前に急に咄さにや成らぬ事が有る兄さんの言しやんすには百両の身の代で急に私を引すと言ふ客が有故お前の所へ行氣なら早う金を才覺せいとの事でムんすわいなア オ、さればおれも其事聞た故手附を渡そうと思つて長右衛門様に三十両借たわいのう 雪、エ、嬉しふムんすお前の姉様のお絹様心立なり發明なりアノ粹な長右衛門様に添遂げさんすと思へば私しや嬉しふムんすわいなア オ、姉貴や長右衛門殿を譽るであいが本によう似た女夫じや 雪、

追附私ら二人りも女夫に成て 才何たら言うて悦ばしたり「ト幸左衛門生酔にて出て 幸
 ヨウ／＼才次郎味ひ事／＼ 才あなたは幸左衛門様 雪、チ、耻し、幸、耻しいとはまだしも
 有り様は身共此雪野にチ執心で有たれと此後ふつ／＼思ひ切りお身に逢わろう程に随分
 見捨ぬ様にしてやつてくりやれ 才是は又改つたあなたが御執心を存じたら何しに私しが
 幸、イヤ夫は御身が義理といふもの雪野も今から心置なく逢たがよい 雪「嬉しうムんす
 幸、アノ爰な色事師め時に才公御身に頼みが有が外の事でもない是へ参り掛けに余義なき
 譯にて腰の物を求めたが折節持合せがない歸宅致す迄金子用立て呉まいか 才「最前兄貴に
 借受升て金子は是にムり升れと私も急に入用の義がムり升て 幸「成程左様の義も有うなれ
 と差し當り幸左衛門武士の捨る事故聞譯ておくりやれ 才「シテ御用は何程でムり升る 幸
 三十兩借受たい 才「成程十兩御用立も三十兩も同じ事左様なら晚迄間違無うお返し被下升
 せ此儘差上する 幸「忝けない是で身共も顔が立念の爲一寸証文を○「ト証文を書て渡し」改
 ておくりやれト此内雪野は才次郎に奥へ來いと仕方する幸左衛門見て 幸「成程何の身共に
 遠慮才次郎座敷に扇を落して参た一寸取て来ておくりやれ 才「畏り升た 幸「其傍に烟草入
 を置た程に雪野も往て取て来てくりやれ 雪「アイ／＼ 才「左様なら一寸取て参り升る」ト
 兩人上手の暖簾口へ這入る 幸「今時の人間にもあんな馬鹿が有るとははじたいあんな一才に

金を持して置く實に無益と言ふものこつちに有れば様々と違ひ分け能ひ愛持た世界の寶身
 共もこやつよあやかりたい物だアハ、ハ、ハ、ハ「ト橋掛りより針の宗兵衛出て來り 宗兵衛
 是は幸左衛門様能ひ所でお目に掛り升た昨日御約束の妹の身の上外から相談もムり升るが
 アリヤと云ふ致し升せう 幸「外からは大方佛壇屋才次郎めで有う 宗「其才次郎が今日中に
 手附を渡す積りでムり升る 幸「才次郎が今日中から身共は今爰で渡して呉れう幸ひ小遣金
 が是に二三十兩百兩の手附として二十兩改て受取りやれ「ト以前の金の内廿兩渡し残りを
 財布へ入る 宗「是程直に婿の明事を「ト金を改懐中して 宗「念の爲証文書て上げ升せう幸
 成程雪野を外へ遣るまいと言ふ証文書て貰う「ト宗兵衛証文書渡す 宗「ろうして雪野は何
 處に居り升へ「ト幸左衛門暖簾口を教へる宗兵衛暖簾口へ這入り直に才次郎雪野引摺り出
 て 幸「こいつらは晝日中見苦しい此さまわへ 才「宗兵衛殿こりや何とするのじや 雪「私し
 は兎も角も才次郎様を手込めにして何とさしやんす 宗「何共せぬ今日から才次郎と顔見合
 しても了簡せぬ今見る前で才次郎さつぱりと切れて貰わう 才「合点の行ぬ身請の相談迄仕
 乍ら、聞へた約束の手附が遅う成た故腹立か○幸左衛門様御覽の通りの譯合故最前の金
 送うぞお返し被成て被下升せ 幸「才次郎そりや何を言ふのじやお身や酒にたへ酔たと見へ
 るマア／＼氣を静めたがよい 才「申幸左衛門様此才次郎酒にたへ酔と致し升せぬ先刻御用

立申た三十兩唯今も戻し被下升せ此通り証文迄「ト以前の証文を見せる幸左衛門取て見て
 幸「ハテ能く似た此方に書た覺へは無い殊に判の無い証文は反古同然コウ」ト引裂
 く「オヤア証文を引裂てこりや三十兩の金銜たのじやなア」幸「だまれおのれが心に引くら
 べ盗み街りする様な幸左衛門じや無い言ひ掛けひるいだ大盗人以後の見せしめコウ」
 〇「ト財布にて才次郎を打拍子に財布切て上手暖簾口へ飛込ひ「南無三今の残りの
 金」ト取に行うとする足に才次郎取付「オ、幸左衛門殿コリヤあんまりじやわいのう」宗「何
 があんまり金も出さず妹を外へ遣るまいたはうぬがあんまりじやわい」ト兩人して才次郎
 を打暖簾口より長右衛門跡より仲居お京お竹お梅附出て長右衛門宗兵衛を投げ幸左衛門が
 手を取り「長、幸左衛門様まだ是にムリ升るか」宗「是長右衛門殿何で此宗兵衛を投た」長「妹
 を餌ばの悪工み殊に今出合頭に此財布少々金の入たが何處から落込だか誰のじや知らぬて
 「ト右の財布を出す」幸「そりや身共の財布お手前ありや恭う存る」オ「申長右衛門様最前お
 借申た三十兩おなたへお貸申たれば其証文を引裂人中で此様に打叩きとふも了簡が成り升
 せぬ」長「マア」おれに任して置がよい幸左衛門此金子はお手前様のに相違ムリ升せぬか
 幸「身共の金子も相違ムらぬ」長「此度勢州のお屋敷から請取た金子は一兩毎に隠し極印今
 アノ金を改升れば皆極印がムリ升る才次郎よりお借被成た三十兩お返し被成升せ」幸「よ、

成程返すまい物でも無ければ爰には其端したより「長、夫では此場が濟升せぬ宗兵衛よりお
 取被成た手附証文お出し被成升せ」〇「ト証文を無理に取り」コリヤ宗兵衛三十兩今爰で渡
 す程に証文を才次郎の名宛に認め直しや「宗、モヤ幸左衛門様此証文書直せばお前様の方は
 手は切れ升ぞへようムリ升ウ」長「ハテ悪ひと有ては才次郎に成り替り金の詮義をする分の
 事」〇「ト懐中より十兩出し宗兵衛に渡し」是で合して三十兩跡金七十兩は長右衛門方へ取
 に来ひ「幸、長右衛門是を請取てくりやれ」〇「ト右の財布を出し」三十兩の内二十兩は証文
 で濟だれ共残り十兩貴様の助力受るも氣の毒故「長、申さばわづらの金ははお納め被成升せ
 其代りには先刻も申升る彼刀の事を」幸「ハテ扱くとい事を幸左衛門決して存申さぬ夫程愚
 痴な貴様に筋なき金子申受るも氣の毒ハテ何をがなナ、幸ひ」〇「ト刀の小柄を抜取り」此
 小柄は貴様の知つていやる後藤祐乗が獅子に牡丹是を貴様に譲り申ろう「長、是は余り急度
 した被成方然し御辞退申は返て如何ムリ升れば頂戴致し升る才次郎は暮ぬ内早ム戻つたが
 よい」オ「お志しの此証文」雪「何から何迄」兩人「難有う存じ升る」オ「雪野おじや」ト才次郎
 雪野宗兵衛付て向ふへ這入る「幸、宿元へ心もせければお先へ歸り申」長「私もお供致し升せう
 「ト兩車に成り可助合羽を着て出て」可「お旦那雨が降て參り升た」長「是々仲居衆旦那斗り
 で能いから傘と下駄が借りたい」仲三人「畏り升た」〇「ト傘と下駄を持來り」モウお歸り被

成升るか 長「賑やかに河原迄送つてたもらぬか 三人「アイ／＼お見送り申升せう 幸「身共は是でお別れ申う 長「左様仰せられずとマアムリ升せ 〔ト皆々向ふへ這入る是にて返し遣物向ふ黒幕設篋囲ひの惣嫁小家此傍に蒲鉾形り非人小家杯有り都て四條河原の体時の鐘よて道具納る 〔ト向ふよりお籠お幾惣嫁の拵へ調子外れの唄を諷ひ乍ら出て 幸「おくば今夜は大分早かつたのう 幸「どうやら空が曇て來た依て早ふ仕舞て去うと思つて 幸「何ば早ふ去うと思つても今夜は錢に成りうむないぞや 〔ト上下より仕出し大勢出て色々素見玄小家の内へ連立這入杯宜しく有る橋掛りより鉄右衛門國侍の拵へにて出て來る 幸「手輕じや遊んでお呉れ 鉄「右衛門「こりや／＼身共は左様な惣嫁は求める所存は無い只後學の爲見物致のだ放せ／＼ 幸「是其様に惣嫁々々と安ういふた物じや無いぞへ 幸「そふ共／＼是でも辻君といふて昔は歌の一ツも讀た者も有るぞへ 幸「後學の爲も有る物か 爰を鼻垂れめ 鉄「何鼻垂れた武士に向つて言語同斷鼻欠女郎め 幸「何じや鼻欠じや爰を田樂め 〔ト兩人鉄右衛門を捕へ天窓を打 鉄「おのれ武士に向つて無禮過言 〔ト三人摺合う橋掛りよりお六半天安下駄妓夫の拵へにて出て此中へ割て這入り 幸「是は玄たりとふした物だモンお侍様おめへ様も御仁体でもねへ高が相手は女の事殊にしが無い商賣先で見つとむねへわな 幸「お六さんはつて置てお呉れ此さぶめが鼻欠と言ひかつたわいなア 幸「夫々無性に刀を差へ

けらかし爰な田樂さぶめが 鉄「おのれ武士の天窓を張かつたな放せ／＼ 兩人「イヤ聞ぬ放さぬ／＼ 幸「是は又困つた物だ見つとむねへわなコウお侍さんわつちも口を聞のだから延喜直しだちよつびり遊んでお出な 鉄「そんなら延喜直しに遊べと申のか 幸「そうでもして清めてお呉れな 鉄「そりや早願うたり叶うたり然らばおぬしと 幸「イヤわつちやムりやせんよアノ子達とサ 鉄「ム、レテ貴様は何じや 幸「妓夫 鉄「何さうとは 幸「一体わつちや江戸産れ身上が悪るさに苦しがりせう事おしに此土地へ漸々此頃來やしたが江戸じやア夜鷹爰じや惣嫁其辻君の世話をする大店の女郎屋なら遣り手若衆追つくるめ送り迎ひの提灯も明りが禁物眞つ暗を所から引出す其由縁江戸じやアさうといふのさねへ 鉄「何さうハテさうにしては美しい姿と言ひ形ちと言ひハテさうとした代呂物じやなア 幸「是々大概にぞめさんか悪ひ癖なさぶじやなア 仕出「皆々「阿房よべらばうめ 鉄「うぬら身共を何せぬかぞ 〔ト仕出し皆々捨臺詞にて笑う鉄右衛門刀を抜仕出しを追駈け這入る 幸「お六さん大きにお世話でムんした 幸「今お出たのに氣の毒じやが延喜直しに何も祝ひじや五んつく取て來てお呉一生のお頼みじや 幸「モウお使かへ本に人遣ひのよい姉さん達だの仕方がねへどうで今夜は潰しだから往つて來よう 幸「サア二百出すから酒を五んつく跡は錢つさり肴よ 幸「承知だわさ 〔ト錢を肩へかけ花道にて空を見て「又ばれにやいひが 〔ト向うへ這入る

此内又仕出し大勢此中へ鉄右衛門頼冠りして交り出てお幾と連立小家へ這入るお窟へ仕出しの袂を引杯色々宜しくある鉄右衛門逃て出るお幾追駈出て 幾最前の生酔待めが喰逃を働くがな 大勢喰逃なら打殺せ〜 (ト仕出し皆々立掛る鉄右衛門宜しく止め 鉄ヤア愚人めら我一人の喰逃に多勢を以て搦めんどは比奥未練我ら如きに刃物を入らぬ目に物見せん覺期ひろげ (ト刀を抜く竹光故皆々捨臺詞にて打落し鉄右衛門を差上げ這入る是にて黒幕切て落す返し

造物向う打抜四條河原夜の景色雨車に踊り地を冠せ道具納る (ト向ふより以前の仲居三人幸左衛門長右衛門可助提灯を持出て花道にて 可「とふ〜日暮升たお宿もお待兼もつとお急ぎ被成升せ 竹此奴さんとした事が夫程早う行度ば先へ行しやんせいなア 京「其様に言しやんすな奴さんじや迎待るゝ者が有まい物でもおいいいなア 梅「いつそ先へお返し被成て池吉でも一ツ上り升せぬか 長「いか様今一ツたへ直しては如何でムり升せう幸「身共は是にてお別れ申 長「進み無くば是非がないおぬし達は最う爰から歸つて下され竹「ろんならお近ひ内に 三人「必ずお待申升る (ト仲居三人引返し這入る皆々本舞臺へ來り長「是々御家來貴公は先さへ歸つて追付お歸り被成とお知らせ申たがよい 可「左様なら提灯をお頼申升る (ト提灯を渡し合羽を脱捨橋掛りへ這入る 幸「イヤ長右衛門何か物案じ顔

に身共に附隨うは合点が行ぬ 長「成程御合点が参り升まい翌中に差上ねば成らぬ刀どうぞお返し被成て下さる升せ 幸「だまれ長右衛門覺へもない身共に一度ならず二度三度何ぞ証據が有つてか 長「サア其証據がムり升せぬ故何卒長右衛門めが心の迷ひお晴し被成て被下升せ 幸「スリヤ身共が兩刀見せいと申のか 長「申兼た事ではムり升れど 幸「いかたも改さそうがモシ其刀で無い時は 長「御存分に被成升せ 幸「面白ひ早く改い (ト腰に差た儘突付る長右衛門小の刀を抜て提灯の灯にて改違う故又大の刀を改違う故こなし有て 長「ハテナア 幸「どうだ違ひ無いか爰な大街めが素町人の分際で武士に向つて様々の言ひ掛け夫のみ成らず大小迄改さらした慮外者先刻連も才次郎に味く遣り掛けたを人中で耻面かゝした吹擧者サア約束通りだコウ〜 (ト打すへる 長「其お腹立は御尤成れどケ様な事も度々有たこなた故 幸「まだ〜ぬかすか大切な刀を余人に摺替られ翌迄に詮義の成らぬ刀の行端どうで命は根腐り物面を見るも胸が悪い (ト唾を吐掛る 長「チエ、 (ト口惜まこなし 幸「何だこりや身共に手向さらそか身共を切氣かサア切れ〜 (ト骸を摺附刀を長右衛門の前へはり出す 長「是は様々の御難題マア〜此お刀は 幸「イヤ刀を手に取からはおれを切るのだサア切れ〜 長「申お浮雲ムり升 (ト刃物を持乍ら幸左衛門をさへる拍子に頬を切る 幸「ヤこりや身共を切さらまたな 長「何をわつけも無い事を 幸「エ、うぬも覺期の

爰は加茂川刀の錆か落水際清き末期の水喰て観念しる「ト切て掛る 長」手が廻つたか逆も命は南無阿彌陀佛未來で言譯致し升 幸「ナ、能い覺期だ「ト切て掛る長右衛門傘を持刀を打落し色々面白き立廻り有て幸左衛門を切伏せホット一息向ふよりか六徳利と竹の皮包を手拭にて提げ出て来る此内長右衛門以前の小柄を落す是を索す内か六と行當り兩人恟りか六は星明りにて小柄を拾ひ立廻りの内合羽を着る事此模様宜しく見得にて拍子幕

下の巻 〔帶屋内の場 桂川道行の場〕

造物見附赤壁納戸口戸棚上手折廻り障子家体例の所入口此次に黒塀其次隣り入口信濃屋と記せし暖簾此取合に用水種積上げあり幕の内よりか熊婆の拵へ煙草盆を扣へ義兵衛帳箱に掛り居る合方にて幕明く 幸熊義兵衛「ト休みやいのう我身の働く入合せに長右衛門めが野良本に大体忌々しい奴つではあるわいの 義兵衛「夫々うんてれがんの長右衛門が仲人すると言ふて隣のお半をアノ才次郎へ嫁入さすは深切で無うておのれの喰餘りを片付る算段 熊嫁の心緒も共々世話焼かつたがどうした事やら頼みの印を今朝隣から返しに來たが其譯の有事を隣のお石もづいたか知らぬ 熊「此婚禮がぐれるとお半めの手紙から言ひ出して長右衛門めをばいまくる算段して置た 熊「ナ、出來たノ、今夜から夜が寐よう成た 熊

時に爲替の百両まだ金を見ぬの兄貴が懐にくすねおると見へるわい 熊「どうで有う今に戻りかつたら酔ひ目に合しまだ其上昨日登つた勢州の五十両戸棚の合鍵して我身に遣と思ふて曲て置た此科も長右衛門めにぬり附る積りじや 熊「ホ、ウ遣れノ、流石は母者人 熊「先夫迄は裏の隠居で晝寐して果報を待う 熊「サア行んせ「ト兩人奥へ這入る向ふより長右衛門思案仕乍ら出て直に内へ這入り 長右衛門「どう思て見ても合点の行ぬ刀の行端幸左衛門が持て居ると思ひ詰今日中に詮義仕て差上升せうと請合うたが所詮晩迄には手に入ず殊に夕アの河原の始末幸ひ雨で水が多かつた故死骸は其儘流れて仕舞たれば二三日は噂も有まいが何れ人殺しの科は遁れまいア、どうしたら能るふやら「トお半隣り入口より出て 幸「長右衛門さん戻らしやんしたかへ逢たかつたノ、わいなア 長「是か半油の小路へ嫁入を我身得心せぬどの事よりや愧しいは聞へて有れど何時迄さうしても居られまいどうで一度は嫁入せにやあらぬわいのう 幸「お前迄が其様に聞へぬ事を私しやどうでも嫁入は否じやわいなア 長「其様に言うてい濟ぬ尤おれが仲人仕た譯はそなたも可愛しわしが身をも思ふからそなたの爺御が臨終の時おれを枕元へ呼びよそなたの身の片付を呉々との頼み氣遣被成など受合うたは爰の事此所を聞譯て祝言してたも是拜むわいの 幸「女子と言ふものは一生に男と言ふは只一人二人りと肌を振るは女子でないと言ふ事はわたしやよふ知つて居る此春お

伊勢参りの戻り道石部の宿の新枕本の殿御と思ひ込んだはお前一人り何はでも嫁入する事は否じやわいなア 長「そりや本の子供心色の戀のと言ふは似たか寄たの年ばい巳は今年〇〔ト算盤出して〕是じやろなたはまた十四あんなりの違ひ人の口の端に掛らぬ内どうぞ嫁入してたも拜むわいのう 半「イエどう有ても嫁入の成らぬ譯といふは〔ト長右衛門の手を懐へ入れる 長「何じや譯なら口で言ぬかいの〇〔ト胸り思入〕ろんなら是で 半「アイ 長「ハア、〔ト此時隣りの内にて 半「左様なら歸り升てお待申升る〔トお絹出て来る 長「お絹か何所へ往ていやつた 半「私しやお石様と段々との相談其内アノ子はこちらの内へおこし升たが合点の行様に言ふて聞して下さんしたかへ 長「おれも今の先戻つて來た所へ此子が來た故色々といふても得心が行ぬ我身替て言て聞してたも 半「アイく女は女同士私が又得心の行様言て聞し升せう 長「そんならわしは奥へ行てドリヤとろくど遣うか〔ト長右衛門奥へ這入る隣の入口よりお石出て來り 半「お免し被成升せ 半「オ、お石様唯今は大きに長はなし致し升たマアくこちらへお出被成升せ 半「オ、お掛い被成升な扱マア最前も申通り段々と此子の事どうぞ合點の行升様宜しふ言聞して被下升様お頼申升る 半「マア私にお任せ被成升せ時にお半様此間からも色々と言ふた上こちらの人にも手を替て言ふて貰ふもお前がいとしさ故夫に否々斗りでは濟まいぞへ先度大阪へ連て往た時八百屋お七の狂言アノいぢら

しふて成らぬ可愛相やと夜舟での評判私や一ツもいぢらしうない親の定めた縁付を嫌うお七は不孝者其心故譯も無い事引出し江戸中を引廻し浮名を流た鈴ヶ森親御の極た婚禮を嫌んすればお七が能い手本不孝の野で其身斗りか誰が名迄出様やらうことを能う思ひ直してなア是〇是程言ふても得心は行ぬかお前の様な聞譯のない子が有うか愛想もこそも盡果たわいなア 半「おば様堪忍して下さんせいなア 半「イエく了簡仕升せぬと言ふは嘘じや何のお前に愛想が盡てよい物か是程言ふても得心の無いはよくく縁のないと言ふもの仲人にてちの人なり私の弟に取嫁の事此縁談さつぱりと止に致し升せう 石「常からお半々々と可愛がつて被下御夫婦のお世話被成た此縁組變改受るも娘の氣儘母の育てが甘ひ故と世間で笑れるは厭ねと長右衛門様御夫婦に何と顔が合されう愛の所を考へてどうぞ聞譯てたもいのう 半「ア、是お石様否な所へ無理に遣つてはなア申〇〔トこかし有て〕何はも有事煩ひでも出ては悪ひ 石「じやと申て 半「ハテどうなと思案もムんせう〔トお半お石隣の内へ這入る向ふより針の宗兵衛跡よりお六赤合羽笠を冠りし形りにて出て花道にて叫きお六は用水桶の蔭へ隠れる 宗兵衛「帶屋長右衛門殿は内方でござんすか 半「帶屋長右衛門はこちらでムんすか聲高にマア何所からムんした何の御用か存じ升せぬがちつと内に取り込んだ事が有り升て 半「何じや取込んだ事が有るわしや愛の内に縁の有才次郎様の事に付て咄しが有て來升

た 綱「そんなら才次郎が○ハテなア 宗「サア才次郎様の事に附て長右衛門に逢に來たサア
 長右衛門に逢う 綱「是は又聲高に言すと譯を言んせいなア」ト長右衛門出て 長「お絹我身
 聞に及ばぬ針の宗兵衛殿昨日祇園で逢うたがさよ／＼しい何の用じや 宗「問れず共言に
 や成らぬ昨日手附の金は請取たが跡金の七十兩濟ぬ内は何所迄も雪野はおれが妹今朝祇園
 町へ往て見たら雪野は夕ア欠落仕たと乱騒ぎ今日中にわしが連て戻り升と受合て來た雪野
 が行先お内義隠さすにふれに言ふて下んせ 綱「色々の事言ふ人夫を私が知うかいなア 宗「
 知るも知らぬもいる物か高が雪野が首丈惚て居る才次郎はこなたの爲には現在の弟じやな
 いか 長「成程女房の縁に因り雪野を隠したと疑は聞へたが其様な悪巧みする長右衛門でも
 ない併し言ふた斗りで疑も晴れまい跡金の七十兩今渡して遣う借に請取れ是で雪野が身の
 上に故障が無と言ふ証文書て貰いたい 宗「そりや金さへ取れば何本でも硯箱貸て下んせ」
 ト帳箱の硯にて証文を書長右衛門胸巻より金を出して 長「幸ひ屋敷から請取た金改て請取
 れ 宗「跡金の七十兩どりや請取か」トお絹止めて 綱「是待た其金渡されぬ 宗「とは又何で綱」
 其金は私しが渡し升せうろふ思ふて下さんせ 宗「スリヤ其金は内義のこなたから 綱「長右
 衛門殿お前の志しは嬉しうムんすが日頃から口やかましいお袋又義兵衛様の手前私が弟の
 放埒に此金遣せ升ては濟ぬ程にマア納めて下さんせ宗兵衛殿聞しやんす通りの譯じや程に

七十兩は私が才覺して渡す程に翌迄待て下さんせぬか 宗「成程譯を言ふて頼しやる事違ひ
 も有まい翌迄待て進せ升せう 綱「そんなら聞譯て下さんすか夫で私が義理も立て落付たわ
 いなア 宗「夫は夫にして長右衛門殿おれが世話してこなたに賣たい物が有が買ては被下ま
 いか 長「シテ其品は 宗「其賣人今呼升せう」ト表の方へ來て「チイお六／＼」ト用水桶
 の後よりお六出て お六「ユウすてきに待たせたのう」ト内へ這入り「御免成せへ升 綱「
 モシ／＼お前人の内へ天氣の能いに合羽を着ておかしな女中さんではあるわいな 六「アノ
 わつちやアお笑な形りサ日和の能いに赤合羽おじな所から拾つて來た何ぞの役に立うと思
 つてマアお笑ひから脱升せう」ト合羽を脱ぐ 長「宗兵衛殿が世話で賣たい物とはシテ其代
 品物は」トお六懐中より小柄を出す 宗「此小柄は昨日祇園で幸左衛門殿から長右衛門殿に
 渡した小柄 長「成程是がさうしてこなたの手に 六「おじな所で拾ひやした 長「なんと 六「
 然も夕ア四條の橋下で四ツかつちりに夜鷹小家仕舞て歸る雨上り蒲鉾の火も薄暗い河原千
 鳥か辻切か血染れ仕事にわつちやア悔りどふ仕様と逃るはづみに泥の中爪突たのが此小柄
 獅子に牡丹の高彫は後藤とやらが細工だと商内相庭は幾ら共直打やア眞つ暗闇の夜に命と
 釣替七十兩いひ買物だ長右衛門さん何と安ひ物じやねへかねへ 長「そんなら其時其小柄を
 宗「こゝろ買にや成るやうてや 宗「外へ賣てはおめへも濟めへ」云ふこゝろなしよ買てお吳な

○「ト長右衛門の顔を見て」道理でさつさから似て居る人と思つたが長右衛門さんとはおめへの事か何の事だおめへわつちを知て居るだらふ。長成程う言へば見た様にも有り。六「見た様も能く出来た今じやアこんな苦しがり是でも江戸の深川で勤と言ふも氣耻しいわつちが客の帯長さん。長いかに丁度九年跡時分は八月月見の果友達衆に引張られ箱町川岸とか言ふ所から小船に乗つて四五人連。六初會の客は上方者と座敷斗りで振たのを。長「愛らが粹と只一人り鼻毛延して裏とやら腰を据たる雨の朝。六馴んで見りやア情の有とつか意氣だと思ひ込み。長「こつちも獨身跡先見す。六末は夫婦の約束も。長「どうなとせふと戯れを。六「まじめに受た自惚から。長「箱根を越してはるくぐと。六「尋ねた野暮の行當り。長「吾妻女郎に。六「京男。長「替た所で。兩人「逢坂じやあア。長「そんなら此女中さんは○本に油斷の成ぬ。六「サア今日からわつちやアおかみさんだ愛の内は助かねへと言ふた所がどふで始終が泣別れ手切足切取りやア仕めへし其替り此小柄直切こなしに七十兩買つて呉れてもいひじやアねへか。長「いかに其品七十兩買て遣るまい物でも無が雪野が身の代にさへ買さぬお絹が手前今更何共。六「そんなら女房に成てもいひかへ。長「サア夫は。宗「買すば雪野が跡金取う。長「サア。六「買つてお呉か。長「サア。三人「サア。六「こいつは恐れ乍らと出すば成るまい。六「どふでそふでも仕さア片が付くめへ。長「江戸の女中さん宗兵衛さんとやらも待て下さんせ。宗「又お内義留るのか。長「其小柄私を買升せう。宗「ソテ其金は。長「後共言す今爰で○「ト櫛と笄を長右衛門の傍へ持行「最前からの様子と言ひ合点の行の小柄の有所もどふやら弟の○イヤ女の魂は此櫛笄夫婦の中でも違うは金づく此二品を質物替りに其七十兩私に貸ては下さんせぬか。長「ユウよしいかにも是を形に七十兩は我身に貸う。長「そんなら貸て下さんすか○サア望の通り七十兩しつかり受取んせ。宗「サ、取らいでか。六「待ち此金はわつちのだよおめへの金は愛のかみさんが受合て翌迄待たじやアねへか。宗「サア夫はそう言ふた物の。六「わつちの方は今日中に命替りの此小柄買にやア女房と五月蠅りうみさんが出した金こりやアわつちが方へサア長右衛門さん代呂物はあけるよ「ト小柄を長右衛門に渡す。長「そんなら小柄は。六「宗兵衛さんおめへ金が欲しいかへ。宗「サア欲しけりや社取に來たのだ。六「そんなら此金おめへに上げやふ其代り今の證文をお呉れよ。長「成程どつちへ出とも同じ事此証文は貴様へ渡そう○「ト証文渡し「サア金請取う。六「うるさく金を欲しがの「ト金を渡と。宗「難有ひそんなら直ぐに。六「行うわな○「ト門口へ出て「折角仕込んだ小柄のもくろみ。宗「どふやらこふやら七十兩。六「取たと思へば反古一枚長右衛門さん縁切たと言ふ去り狀替りに女の方から取て置な「ト証文を投込。長「こりや是雪野が。長「そんなら女中は。宗「眞實男に。長「何にも言ぬ。六「澤山だよ「トお六

衛さんとやらも待て下さんせ。宗「又お内義留るのか。長「其小柄私を買升せう。宗「ソテ其金は。長「後共言す今爰で○「ト櫛と笄を長右衛門の傍へ持行「最前からの様子と言ひ合点の行の小柄の有所もどふやら弟の○イヤ女の魂は此櫛笄夫婦の中でも違うは金づく此二品を質物替りに其七十兩私に貸ては下さんせぬか。長「ユウよしいかにも是を形に七十兩は我身に貸う。長「そんなら貸て下さんすか○サア望の通り七十兩しつかり受取んせ。宗「サ、取らいでか。六「待ち此金はわつちのだよおめへの金は愛のかみさんが受合て翌迄待たじやアねへか。宗「サア夫はそう言ふた物の。六「わつちの方は今日中に命替りの此小柄買にやア女房と五月蠅りうみさんが出した金こりやアわつちが方へサア長右衛門さん代呂物はあけるよ「ト小柄を長右衛門に渡す。長「そんなら小柄は。六「宗兵衛さんおめへ金が欲しいかへ。宗「サア欲しけりや社取に來たのだ。六「そんなら此金おめへに上げやふ其代り今の證文をお呉れよ。長「成程どつちへ出とも同じ事此証文は貴様へ渡そう○「ト証文渡し「サア金請取う。六「うるさく金を欲しがの「ト金を渡と。宗「難有ひそんなら直ぐに。六「行うわな○「ト門口へ出て「折角仕込んだ小柄のもくろみ。宗「どふやらこふやら七十兩。六「取たと思へば反古一枚長右衛門さん縁切たと言ふ去り狀替りに女の方から取て置な「ト証文を投込。長「こりや是雪野が。長「そんなら女中は。宗「眞實男に。長「何にも言ぬ。六「澤山だよ「トお六

宗兵衛向ふへ這入る奥より義兵衛お熊出て 熊「ナ、世帯持の旦那お歸りか十町かそこらの屋敷へ半日の上掛つて内の事はどふ成る朝から晩迄お山狂ひ本に穀潰しでは有わいの 義」母者人兄貴に限つて何のそんな所へ大方長半の益屋へ這入て居られたので有う 長「義兵衛よりや何をいふ長右衛門まだ一文の勝負も仕た事はないぞよ 熊「イヤめつたに違ふた事も有まい何でも金が這入る穴が無うては叶ぬヤイ長右衛門一昨日返に往た爲替の百両サア爰へ出しや 長「イヤ其金は折角参じ升たれど留主でムリ升た 義」是々兄貴腔いやんを先さへ往て尋ねたら一昨日こなたに渡したと爲替手形出して見せたが夫でもこなた請取んと言ふのか 長「サ夫は 熊」是義兵衛詮議には及ばぬモウ川東へ金は飛だて有う昨日勢州から取た五十両も心元ないサア爰へ出して見せや 長「そりやお目に掛け升せう○」ト腰の鍵よて戸棚を明け「ヤこりや入れて置た五十両がないと 熊」エ、 熊「長右衛門金はどふじや錠の下りた此戸棚誰が取う是もお曲め遊ばえたか 義」イヤ母者人こんな事斗りじやないまだくゑらゐる事が有る隣りの娘お半と念頃して居ると近所の評判よもやと思ひ聞捨に仕たが是此千話文マアく口の所は置て伊勢参りの下向道石部の宿の仮枕今しも忘れ兼参らせ候ぞうぞく今一度嬉しき御げん願上参らせ候長様参る半よりアハ、ませたりなく是見やんせ 熊「こりや大それた隣りの娘とそゝのうし嫁入の邪門よう仕たなア 熊」成程そうお聞

被成てはお腹立は御尤でムリ升が長右衛門殿に限つて何の不義が有て能いものでムリ升せう夫は相手が違うてムリ升る 義「イヤお絹様しつかりとえた長様参る半よりといふ儘な証據がある 熊」其長様参ると書て有に依て猶間違でムんすわいなア 義「全体誰と間違うて有るへ 熊」隣の丁稚長吉でムんす 義「こりやおかしいわい是長吉の長の字はやつぱり長の字じや 熊」其様に言ふて居る間に長吉を呼でかじや 義「本にそうじや○」ト門口より「長吉内に居るか長吉く」ト隣の内よて 長「吉、ハイく」○「ト長吉出て來り「何の用でムリ升る 義」貴様を呼だは別の事でもない我身とお半女郎と念頃して居ると兄嫁が言れるがよめやろふ言ふ事は有まいとつぱりと言譯仕やいのう 熊」是長吉殿爰じやぞへ覺への有事なら有と言ふて仕舞んせ 義「熊」サアくどうじや 長「吉、ハア、誠や悪事千里とやら隠すより顯るゝと皆様の手前目お耻しいが遠うからお半様と念頃仕て居升 義」長吉大事の所じやしつかり言譯をせいやい 長「吉」何を隠し升せう此春お伊勢参りの下向の時石部の宿屋でツイ女夫事したお半様の念頃男と言ふは何所迄も少分乍ら此長吉でムリ升る 義「やいくそりや何ぬらすのじや此狀の宛名長様参る半よりこりや長右衛門の長な長様参るじや 長「何じやいお長様参るはおはもじ乍ら此長吉の長の字じやわいなア 義」エ、思々しい 熊」長吉殿よふ言んした申噓様現在不義の相手が出たから、旦那殿に不義はムリ升まいがな 熊」め

んな奴がうせて故義兵衛早ふいなして仕舞へ 義「さういひにさせ 熊「まだ二口の爲替の金詮義もせねばならんが拍子坂がまた横丁の生洲で一抔入れて來う我身もおじや 義「うんなら母者 熊「サア行ふ」ト兩人橋掛へ這入る奥より下女お松行燈を持出て直に這入る 申長右衛門様お前はさつゝい濟ぬ顔付必ずひよんお思案して下さんとなへ十年連れ添女房じやもの私が手前立ぬ事も何にもないぞへお半女房の事も恪氣所か顔へも出さぬはお前に氣の毒がらす笑止さばかり私か心根を不便と思ふて必ず見捨て下さんすなへ 長「お絹忝ひ百兩の金は最前の仕義で才次郎が爲そなたへするではないろなたの親御へ心の義理又五十兩の盗人も知れては有と義理と言ふ字に詮義もならず濟ぬは隣りの事とふも言譯がわいのう 絹「エ、女房に何の言譯本に最前からのもや〜でまだ夕飯も上るまい肴拵へて來ふ程に一ツ上つてちやつと休ましやんせいなア 長「イヤ〜モウ酒も吞どうない 絹「女房と言ふものは兎角男の機嫌の能いのが樂みどりや爛を附けてこうか」トお絹奥へ這入る 長「お絹忝ひろなたの様な女房が世の中に最う一人りと有うか不所存な長右衛門を男と思ひ辛抱する心いき千年も萬年も連添て禮が言ひたいが濟ぬはお半が腹とふも世間へ顔が〇其上屋敷から預つた刀の行端また其上に夕ア河原でのしき所詮生きては言譯立す死うと覺期極めたれとせめて女房に余所乍ら暇乞と内へ戻つてけつく苦勞をのけ此身は何たる我身

乍らも愛想が尽たわい」ト書置を書く此内お半出て 半「長右衛門さん 長「そなたまた寐やらぬウ」ト書置を隠す 半「アイ最前の返事を言ひに來升たわいなア 長「返事を言ひに來たとは油の小路へ嫁入する氣か 半「アイ是迄の事はふつ〜思ひ切り升る 長「チ、出かしやつた〜夫で互ひの身の納り又腹の申合もお絹が能い様にするで有ふ何も案じる事はない人が見たら何の角のと言へば悪ひサア早ふいにや〜」 半「アイお前は随分煩らわぬ様にし下さんせ 長「うおたも随分機嫌能ふ」ト内にて 絹「こちらの人長右衛門殿〜」 長「アリヤお絹が聲〇」トお半を門口へ突やるお半懷より書置を出し駒下駄に結び花道にて窺ひ居る「どふやらおかまゝい今の言ひ様去にやつたか知らぬ〇」ト門口へ出て隣の内を見込亦戻り駒下駄に爪突き取上げ書置を見て「何じや書置の事やア〇」ト胸りお半向ふへ這入る長右衛門書置を讀み「ね前と縁切り外へ嫁入する心も無く殊に只ならぬ此身世間へ知れても私しは厭わね共お前の名を出るのが悲しき桂川へ身を投げ參らせ候ヤ、桂川〇可愛や〜」アノちつばけな者マア一人り何の遣れ様おれも行くぞよ〇」ト花道へ行「お絹堪忍してたも親父様御免被成て被下升せお半やアイ〜」ト向ふへ這入る橋掛より宗兵衛袋入の刀を持出て來る隣の内より長吉出て 長吉「兄貴じやないか 宗「長吉か 長吉「愛へ這入らんせ扱義兵衛から請取た五十兩約束の骨折賃請取つじやれンテ件の脇差持てムんしたか 宗「夫れ請

取れ「ト金と引替」かりや何やら譯も知らぬが此脇差とふした物で骨折賃に五十兩も義兵衛は出すのじや 長言「ハテ其五十兩も爰の内の婆々が合鍵して盗んだのじや此とすは長右衛門が屋敷から預つたを戀の意趣に石部の宿で摺替たはかれが細工 宗「夫を又義兵衛がとふそるのじや 長言「長右衛門めが偽物共知らず屋敷へ持て行てゑらいお眼玉所で此正眞を義兵衛の手から尋ね出したと屋敷へ持て行と長右衛門は吳服所を取上られ義兵衛へは二代の吳服所我らは内のお半と女夫に成て何所も角も納るわいの 宗「おのれら二人り乍らよう揃うた悪人めこりや死れた親父殿は此家の隠居半齊様に大恩請たる帶屋に縁有才次郎殿と妹雪野が中を世話被成長右衛門様が難義と聞て恟り上へ斗りは敵役わざと仲間へ這入てうぬらが巧を聞出さん斗り今渡えたはやつぱり偽物實の刃は爰に有るわい 長言「ハア、仕舞ふたこあたが立役に成てはこりや叶わぬ「ト長吉逃て這入る奥よりお絹出て 絹「様子は開升た宗兵衛殿何かと世話でふんした 宗「私の働らさは御恩報じマア紛失の五十兩と摺替た刀を渡し升せう 絹「ヤレ、嬉しや旦那殿長右衛門殿「ト隣よりお石出て 石「申、お半が見得升せぬ故尋ねて見れば此書置 絹「エ、お半さんが「ト長右衛門の書置を見附け 宗「よ、扱は夕アの人殺しを名乗つて長右衛門殿も行しやつたの 絹「石、何人殺しとは 宗「四條河原で悪者の片岡幸左衛門と言ふ侍を幸右衛門殿が殺した故最前のお六が身に掛り其

事の濟た事は知らんせぬ故 絹「扱はお半と一所に桂川へ是男共「ト両家より下男大勢出て 石「爰で彼は言うていられん早う桂川へ 絹「此刃は宗兵衛殿お屋敷へ頼み升 宗「畏り升た 大勢「サア、道を分けて行ふ「ト義兵衛長吉出て 兩人「其脇差を「ト掛る 絹「そんなら宗兵衛殿 宗「爰構わずとムり升せ「ト皆々向ふへ這入る宗兵衛義兵衛長吉おかしみの立廻り能き見得にて拍子幕

造り物一面の淺黄幕時の鐘にて幕明く「上下より帶屋信濃屋と印したる弓張提灯を持下男大勢出て両方へ別れ這入る 澤「り「月の桂の川水に浮名を流すうたかたの泡と命を信濃屋のお半を脊に長右衛門時雨をしぼし足休め「ト是にて淺黄幕切て落す

造物向ふ一面打扱桂川の景色真中二重蹴込砂の書割上下蛇籠柵上手に柳の大木長右衛門着流し一本差頬冠にて振り袖形りのお半を負ひ立掛り居る都て桂川の体一面に所作舞臺を敷事 澤「御池通りも影凄さ柳の馬場を跡に見て急げば名残押小路妻にも別れ鐘の音も涙含みて雨ぞ降る「ト此内お半を落ろし平舞臺へ下りる 澤「堀川過て漸々と急ぐとすれと墓取らず梅津の橋を渡れ共縁の淺瀬か水濁れて蛙も今は啼尽し男心をかこつにぞ本に思へば昨日今日お手本書て貰うたり色のいろはのお師匠様夫から思ひ染浴衣伊勢の戻りよ合宿の石部とやらの木枕が堅ひお前と新枕添寐の夢を覺せとや其馬士節に起されて○「笠は照々紅の

紐戀を鈴鹿に袖疊る雨の土山ナアエ濡て濡るゝナアエ心の丈を結ばれて胸も今更疊るなり
 涙と共に聲疊り 長右衛門「是は半能ふ聞や私しころは幸左衛門様を手に掛た人殺しの身の上
 成れば死なねば成らぬそなたは跡に長らへて親御へ孝行尽してたも お半「是いなア長右衛
 門さんも行いで耻かぢい此腹帯はどふ仕よふへ殿御持たいでやゝ産で長らへ居よとは胴
 欲じや一所に殺して下さんせ 淨「露の命をませ垣の消へも入り度風情なり長右衛門も胸せ
 まり其心根の不便さに涙の淵に底意なく共に沈まん覺悟ぞと涙に涙添へにけり○「人事言
 ふて二人りが身すぎあぢな世すぎや四ッ竹に「ト竹八讀賣の形り三味線を持か糸本と行燈
 を持出て お糸「是は皆様御存じ乃四ッ竹新内でもり升 竹八「上下揃てわづか紙代お急ぎの
 無い方は時にだまつて居るもあんまり張合がぢい故○ 淨「ね耳情けや戀の道暗い夜通も看
 板の行燈な中の氣さんじはお邪魔にちよつと成駒や越へて川邊へ來りける「ト宜しく振り
 有て本舞臺へ來て「よふく何じや美しい娘を連れて○お糸見たか 糸「ううでんすなアど
 うでも一朱の口と見るわへ 長「イヤく私しや何も怪しい者ではムらぬ此桂川邊の知る
 方へ此子を送り届るものじや 糸「ム、ろんなら其子を 竹「イヤどふても合点の行ぬわへど
 ふやら二人りは○イヤ私しら二人りが身の上も元は戀ゆへ此通り新内節や四ッ竹で粹が
 身を喰ふ讀賣の今の身の上 糸「お二人りへ意見じや無いが商賣の 竹「此四ッ竹でなア噂ア

糸「歸り仕事を張込んで 竹「くせり掛うか 淨「爰に都の戀の淵○「情けにはまる堀川の○「
 名うて娘にお浚とて○「能い衆る衆の花嫁盛り貰ひかくれど○「此娘じたい米屋の傳兵
 衛とは○「親には言ぬ忍び逢ひ夫で余所への○「嫁入りを○「無や世間の口の端に掛りや
 繋る傳兵衛さん○「お内義さんへは濟ね共惚れたが因果浮世じやと○「思ひ定めし濃紅葉
 色も今宵が血汐染 糸「お前もマアアノ様な娘御の傍で喜延の悪ひ心中の様な事は置なさん
 せいなア竹「成程ろんなら目出度喜延直しよ女夫に成たお定りの 淨「高砂や○「此浦船に帆
 を揚て四海浪間に入る月や可愛々々の明け鳥○「聲に恟り心なし一人り遅れて歸り足見渡
 そ向ふにアラ不思議や年經る田螺と思われて彼の畝道に駆け上り轉りと寐たる其様は日南
 ばこそと見へにけりかゝる所へ恐しや泊り鳥の朝歸り是を見るより時分はよしと思ひつゝ
 田螺の胴中ひつ嚙へ梢こるうに飛上りこりやたまらぬとさろくの田螺ちよちよら節にてや
 つて吳よ○「さつてもやさしや伽羅の古木にやんれさも似たりお目のすゝしは瑠璃の壺
 共申べしヤレよいやなアイヤなア暁り玉ふ御聲と春の林の梅ヶ枝には法花經の鶯よりも
 しはらしや○「鳥大きにだまされて悦ぶはづみ手を放し川へざんぶとかつことし田螺大き
 は悦んでヤいろこな間抜の馬鹿鳥おのれが色の黒き事か齒黒さぶの上げ土か眼この内のお
 ささ事續辛壺共言ひつべまがアくく泣聲は年貢の訴訟する如く阿房鳥と言ひ捨て浪間

へこそは入りまけり〇」どかふ言ふ内明烏我も寐ぐらへ急がんと打連て急ぎ行向ふに見ゆる人影はもしや追手と心せきイザと手に手を鶏の聲早東雲の空の色石を袂に糸と針縊子の帯屋と信濃屋の 大勢か半ヤアイ長右衛門ヤアイ 等」と呼ぶ聲に見付られじと足元も乱る月の桂川水上へとぞ急ぎ行「ト是にて大勢弓張提灯を持出て取巻見得宜しく打出し

演劇 増補月桂川 終
脚本

明治廿七年八月六日印刷
明治廿七年八月十三日發行

(定價金三錢)

版 及 行 所
權 興 權 有

大阪府東成郡東平野町大字南平野五百四十六番屋敷著作者故 金澤龍玉相續人

大 關 シ 十

大阪府東區備後町四丁目四十番屋敷

版權所有者
兼發行者

中 西 貞 行

大阪府東區内本町橋詰町六十八番屋敷
周擴社

印刷者

前 田 菊 松



